

発行年 2005/03
著者 加藤寛, 藤井千太, 大澤智子, 広常秀人
出典 日本トラウマティック・ストレス学会第4回大会シンポジウム「援助者のストレス」

3 消防隊員における外傷体験とその影響

発行年 2004/03
著者 松井豊, 畑中美穂
出典 日本トラウマティック・ストレス学会第3回大会シンポジウム「二次的外傷性ストレス」

4 消防隊員における日常的なトラウマティック・ストレスとその対処 ～日米消防隊員の比較から～

発行年 2004/03
著者 安達健治, 前田正治
出典 日本トラウマティック・ストレス学会第3回大会シンポジウム「職務とトラウマティック・ストレス」

5 災害救援者への精神保健上の早期介入; 殉職事故後の活動から

発行年 2004/03
著者 加藤寛, 神吉みゆき, 高宣良, 藤井千太, 岩井圭司
出典 日本トラウマティック・ストレス学会第3回大会シンポジウム「職務とトラウマティック・ストレス」

ヒット件数:5

検索

検索語入力

検索語

- キーワードを入力し「検索実行」を押してください。
- キーワードが複数あるときは、スペースで区切って入力してください。
- 「キーワード検索」は、関連用語から検索することが可能です。

検索条件 AND OR

表示件数

表示順

検索トップ>検索結果

[HOME](#) | [About JSTSS](#) | [What is PTSD](#) | [PTSD Topics](#) | [Conferences](#) | [Journals](#) | [Membership](#)

Copyright (c) 2001-2007 Japanese Society for Traumatic Stress Studies All rights reserved.



診断と治療

▲ HOME

▶ About JSTSS

▶ What is PTSD

▼ PTSD Topics

- ・ 自然災害
- ・ 人為災害・事故
- ・ 犯罪被害者
- ・ ドメスティック・バイオレンス
- ・ 児童虐待
- ・ 診断と治療

▶ Conferences

▶ Journals

▶ Membership

🔍 PTSD Topics トップに戻る

BACK Numbers

『二次受傷』

- ▶ 二次受傷とは？
- ▶ 誰が二次受傷を負うのか？
- ▶ 予防と対策

■ 二次受傷とは？

二次受傷とは、「代理受傷」「共感性疲弊」「外傷性逆転移」と呼ばれている現象の総称であり、「外傷体験を負った人の話に耳を傾けることで生じる被害者と同様の外傷性ストレス反応」を指す。例えば、犯罪被害者をクライアントに持つ臨床家、子どもが自動車事故に巻き込まれたという知らせを受けた両親、戦争体験の取材をしているジャーナリスト、被災者の調査をしている研究者、職業上、悲惨な場面に曝される救急隊員や消防士などが二次受傷を負うと示唆されている。

二次受傷の症状としては、いわゆるPTSD症状(再体験、回避、覚醒亢進)、燃え尽き、世界観の変容などが挙げられている。つまり、被害者の語りが繰り返し頭の中で再生される;クライアントが描写した外傷体験がフラッシュバックや悪夢として体験される;夜道を歩くのが怖くなり、小さな物音に敏感になる;家族の安全を極度に心配する;配偶者や恋人と親密な関係を維持できなくなる;支援者としての適性を疑うようになる;などが含まれる。

■ 誰が二次受傷を負うのか？

二次受傷の研究は1980年代から始まり、調査は臨床家以外にも被害者と情緒的な関わりを持つ人を対象に行われてきた。ここでは、臨床家を対象にした研究結果についてのみを記す。

二次受傷をもたらす寄与要因は3つに大別することができる: 1) 支援者要因、2) 個人要因、3) 職場環境。

まず、支援者要因としては「クライアントの外傷体験の種類」、「トラウマケースに対する曝露」、「臨床訓練」および「臨床歴」などが二次受傷の程度を左右すると示唆されており、外傷ケース中でも性暴力や虐待ケースを多く担当し、トラウマ物語への曝露が多く、外傷に関する治療技術や知識が乏しい専門家に二次受傷症状がより生じているようである。

個人要因として特定されているのは、「過去にトラウマ体験」があり、「既存のストレスレベルが高い」「若い」「女性」の臨床家により多くの症状がみられた。

最後に、職場要因としては、「情緒的および技術的なサポート」を職場から得られていると感じている臨床家はそうでない人より二次受傷になり難いようである。逆に、外傷臨床に

関する理解や共通認識がない同僚が多い場合は二次受傷に対する脆弱性を高めるようである。

研究の結果には含まれていないが、社会・文化要因も二次受傷の寄与要因として含められるべきであろう。臨床は社会や文化の文脈の中で行われるために、社会がトラウマや臨床に対して示す態度は治療関係に影響をもたらす。例えば、メディアが被害者をどのように扱うかは彼らの予後に良くも悪くも影響をもたらす。また、臨床家の社会的地位にも大きく関わる。

■ 予防と対策

二次受傷は、起こるか起こらないかではなく、いつ起こるかの問題である。つまり、外傷ケースを扱う臨床家にとっては避けられない課題である。では、どのように予防すればいいのだろうか。キーワードは3つ：1)準備、2)サポート、3)バランス。

まず、「準備」。外傷ケースを扱う臨床家はケースに即した訓練を受けること。未消化の個人トラウマを抱えている場合、その課題を個人セラピーで扱うべきである。未処理の課題は必ず逆転移の要因となるからである。

第2に「サポート」。トラウマ臨床は一人ではできないし、行ってはならない。臨床家同士はもちろんのこと、異業種間での支えが必要である。同時に、被害者への社会的なサポートも必要である。彼らへの支援が充実すれば、臨床家は治療に専念することが可能になる。


最後に「バランス」。外傷ケースばかり診るのを避ける。不可避の場合には、予約時に快復途中にあるケースを重症ケースの間に入れる。そして、私生活を充実させ、仕事以外の時間を設ける。(兵庫県こころのケアセンター 大澤智子)

 [TOPへ](#)

[←INDEX](#) [自然災害](#) [人為災害](#) [犯罪被害者](#) [ドメスティック](#) [児童虐待](#) [診断と治療](#)
[・事故](#) [・バイオレンス](#)

[HOME](#) | [About JSTSS](#) | [What is PTSD](#) | [PTSD Topics](#) | [Conferences](#) | [Journals](#) | [Membership](#) | [Links](#)

Copyright (c) 2001-2007 Japanese Society for Traumatic Stress Studies All rights reserved.



V 研究成果の刊行に
関する一覧表

V 研究成果の刊行に関する一覧表

1. 研究発表

口頭発表

- Hiroshi Kato, Tomoko Osawa, Hideto Hirotsune, Atsuro Tsutsumi. Community Intervention after the Major Traffic Accidents. IV World Congress on Traumatic Stress. June 21 to 24, 2006 Buenos Aires City, Argentina
- Tomoko OSAWA, Hiroshi KATO, Hideto HIROTSUNE. 'Lesson Learned or Not', Massive Disaster and Mental Health Intervention in Japan. The IV World Congress on Traumatic Stress Studies. 2006/6/21. Buenos Aires.
- 加藤寛. 大規模災害後の治療的介入の可能性：長時間曝露法及び複雑性悲嘆治療の試み. 日本トラウマティックストレス学会第6回大会, 2007/3/10
- 大澤智子, 加藤寛. 消防職員における惨事ストレスの耐性要因について. 日本トラウマティックストレス学会第6回大会, 2007/3/10.
- 前田正治. えひめ丸事故における通文化的問題—日米補償交渉と謝罪をめぐる国民感情の相違. 日本トラウマティックストレス学会第6回大会, 2007/3/10.
- 飛鳥井望. 被害者及び被害者遺族に対するエビデンスに基づいた治療の取組. 日本トラウマティックストレス学会第6回大会, 2007/3/10.
- 大江美佐里, 前田正治, 前田久雄. ガルーダ航空機事故の長期的影響：10年後の質問紙および面接調査を通して. 日本トラウマティックストレス学会第6回大会, 2007/3/10.
- 大岡由佳, 前田正治, 古賀章子ほか. 被害者支援における精神科医療の有用性とその課題. 日本トラウマティックストレス学会第6回大会, 2007/3/10.
- 加藤寛. トラウマとこころのケア. 武蔵野大学・JSTSS プレシンポジウム. 2006/7/22

論文発表

- 加藤寛. 外傷後ストレス障害—治療の基本的戦略. 臨床精神医学 35(6) 865-870, 2006.
- 加藤寛. 「こころのケア」に内包されるもの. 21世紀ひょうご 創刊号 44-49, 2006
- 大澤智子. 災害時の医療コミュニケーション. 月刊薬事 48 (13)、87-91.
- 大澤智子. トラウマからの解放:EMDR (書評). 精神療法 32 (5)、640-641.